書評・紹介

コーサンビー著
山崎利男訳

「インド古代史」

佐々木教悟

一

われわれがインドの古代史を研究しようとする場合、いくたの困難に直面しなくてはならないが、その困難のなかでもっとも大きなものは資料が乏しいことである。すなわち、宮廷の年代記はカシミールとチャンパーのそれを除いては他になく、多くは漠然とした伝承のみで、インドには歴史書の名に値するものはないのである。そこで考古学の助けをからなくてはならないことになる。しかるに、現在の考古学はきわめて進歩したとはいえ、まだ真に重要な問題を解決するところまで進んではいない。ところがインドには、これまで歴史家が利用しなかった一つの大きな利点ともいうべきものがある。それは、多くの形態の諸社会層のなかに、過去のさまざまな段階を再構成できるような残存がみられることである。しかしその残存をみるためには田舎へ行かなくてはならない。そこで著者がとくに関心をもち重視するのはフィールド・ワークである。

かれによれば、現存している古代インドの文献の大部分は圧倒的に宗教的、祭式主義的なもので、それらの作者たちは歴史にも現実にもなんら関心をもたなかった。それ故にこれらの文献が著作されたときの現実の社会構造を前もって知らないで、これから歴史を引き出そうと試みても、大した結果は得られず、あるいは信頼のおけない結論を得ることになるのでないかというのである。もちろん地域的変化はあるが大筋は同じであり、多くの古い種族集団を未だに残存させているから、インドの社会の階層化せる相をフィールドで偏見なしに調査研究するならば、インド史における多くのことが、そこに反映していることに気付くといっている。すなわち、たとえばバールフットにある紀元前一五〇年ころの彫刻にみえる牛車や村落の家、後二〇〇年ころのクシャーン時代の浮彫にみえる鍬や鋤をひく農民が、現代のインドの村落にまだそのままいるがごとくである。インドを訪づれた人であるならば、だれしも気付くことではあるが、これを歴史の枠に組み入れて、客観的妥当性を有する歴史像として描いてゆくことは、けだし困難な業(わざ)であろう。著者のこの新しい試みは歴史研究の正統派からは異端視されているようであるが、そのこころみが、ある場合にはこころにくいほど成功しているのは(著者にはそのようにおもわれる)、フィールドを重視するとはいえフィールドにのみ頼らずに、文献資料や他の学者の考古学上の成果を克明に調べており、それらをたくみにあわせ用いているからであろう。その研究がユニークなものであることは多言を要しない。

このようにして、かれは原始社会と部族生活、インダス流域の文明、その文明を終熄させて東部に定住するのを可能としたアーリヤ人の侵入、カースト制度や、鉄器、鋤をもっておこなったガンジス流域の開拓、マカダ国の興起と佛教の成立、農村の食料生産に基礎をおく帝国組織をもってしたマウリヤ朝の全インド征服、その帝国の崩壊、デカンにおける諸王国の発展と海岸地方の定住、封建制の出現、その長い過程と佛教の衰滅などの諸問題について考察をなしている。その扱う内容からみて、これは佛教滅亡時までのインド古代文化の研究ということができるであろう。

二

インドの先史民の生活を探究する部門は、全く未開拓の領野といってもいい過ぎではないが、著者はこの部門の究明に異常なほどの関心を示した。そして食料採集に焦点をあてて、細石器をつくった人々およびメガリスを残した人々の居住状況について仔細に述べているが、われわれがもっとも興味をもち、また啓発される点は、およそ前四〇〇〇年かあるいはそれよりも古いとみられる砂丘文化がインドにもあったこと、そして細石器やメガリスをつくった人々がつくりだした文化が歴史時代に連続していることを立証した点である。これらの人々はすでにトランスヒューマンスを行なっているのであり、メガリスが水牛の魔神マソーバーの社として崇拝されたが、その魔神はあるときは女神と結婚し、あるときは女神に敗北を喫するのである。その女神はのちのバラモンの宗教ではシヴァの配偶神なるパールヴァティーとして現われることになるのである。また、トーテムの食物のタブーに関してもいくたの問題を投げかける。かれらは自己の部族以外の者がととのえた食物を受け取ることができなかった。筆者の見解によれば、のちの佛教の僧伽はこれを打ち破った。しかしながら佛教の戒律の中に食物の受取に関する種々の規程がみられるのはその残存ではないかとみられる点もある。アヒンサーの教義発生の背景には、動物の生命を奪わなくても得られる食物がととのったという事実のあることを指摘するのは(四六頁)、一考を要するが、生産関係と宗教の上部構造とに影響を及ぼした先史時代の残存については、このような研究を手がかりとして、今後さらに開発せらるべき部門であろう。本書には、著者がプーナ近傍で採集した細石器が掲出されているが(第3図、五一〜五二頁)、筆者はプーナ滞在中(一九五九年二月)、コーサンビー教授に傾倒しつつ現地でインド哲学の研究に従事していた中田直道氏の案内で研究所(Bhandarkar Oriental Research Institute)付近の砂丘上にて細石器を採集したことがあるが、砂丘文化のあとかたがこのように露呈していて、あまりにも無雑作に手の届くところにあることは思いもよらぬことであった。

三

インダス文化について、著者はその文化が青銅器時代に属するものであるという視点から、その文化における生産面を追究

するが、エジプトとメソポタミヤという二つの類似の流域文化との比較において、この文化の特徴を捉えようとした。これはだれしもかんがえることであり、当然なことであるが、さらにこの文化の代表的な遺跡であるモヘンジョダーロとハラッパーとの共通点の検討からこの文化の社会構造にまで触れている。その場合、われわれの最大の関心事であるところの、この文化とそれに続くヴェーダの文化との関連性もしくは連続性の問題について、きわめて興味のある示唆がなされていることは特筆に値するであろう。従来はただ僅かに出土品の中にシヴァ神や地母神あるいはリンガなど後世のヒンドゥ教に関係があると認められるものが存在する点が注意されてきたに過ぎなかったようであるが、今やシールと生産面との結びつきが検討されて、それらが宗教上の意味を有していたことが論証されるにいたった。また、モヘンジョダーロにみられる大浴場の用途についても、従来はただ推測の域をいでなかったが、著者はプシュカラとアプサラスとの関連性において、これを理解しようとした。プシュカラとプシュカラーヴァティとの関係(二〇七頁)、アプサラスとイシュタルとの親縁性(九八頁)についてはなおも検討の余地がのこされているが注目すべき指摘とかんがえてよいであろう。いずれにしても、インダス文化がほろびたのちも、その文化を産みだした人々——それがパニ族かヴァラシカ族か、もしくは他の種族であったとしても——のうち生き残ったものがあったにちがいないのである。このことの当為性については、すでにわが国の学者が論じている(中村元著「インド古代史」上、三〇—三一頁)。そしてそのことがロータルの発掘ならびにその文明の下限と関係をもつことになるとおもわれるが、著者はその点についてはなんら触れていない。

四

アーリヤ人の生活様相に関しては、さすがに科学者だけあって詳細な考証を行なっている。そして随所に新しい見解を披露する。たとえば、ゴータマ・ブッダの時代は、階級未分化の小集落という形態にあった時代にして、ブッダがクシャトリヤの小部族のなかで生まれたという事実は否定しないが、シャカ族における首長は交代制で選ばれていたのであり、したがってブッダが王子として生まれ、壮大な宮殿できわめて上品な楽しみのなかで生活した云々というような話は、後世の作り話であるとするがごときである。また前六世紀の古代国家の通商路との関係を論じて、マガダの付近に銅と鉄の鉱石が産することに注目し、鉱業がマガダの国家権力の大きな源泉であったとするがごときは独創的な見解であろう。かれのコーサラとマガダの銀貨の打刻印(第20図、一九三頁)の研究は独特の成果をあげているようにおもわれる。

ところで、佛教が成立、発展、衰滅という全過程を歩んだ一五〇〇年間に、インドは半遊牧的な部族生活から最初の絶対君主制をへて封建制に変わった。したがってインドにおいて佛教が諸段階で果たしたさまざまな役割は、インド文明について真剣に考察するときに中心的な問題とせねばならない(一五一頁)

とするところに、著者の佛教に対する対面の仕方がよくあらわれているが、それにもかかわらず、佛教の歴史的展開に対する掘り下げ方は、まだ充分でないものがあるといわねばならない。すなわち、インド以外の地への佛教の伝播は武力の影響も武力に応じて成長した政治的影響もなしに行なわれた。しかるにインド内部における完全な消滅がインド以外のところの成功と正反対であるのは不可解であるという。この顕著なしかもたがいに矛盾した二つの特徴を指摘したことは重要であるが、著者はそれに対してなんらの説明も解釈もあたえていない。

しかしながらブッダの入滅後すくなくとも一五〇〇年間、佛教がインドにおいて発展をとげたことについて著者は充分な認識を有しているとしなくてはならない。著者は初期の佛教経典に近代的な政治経済学の見解が示されていることに驚歎の眼を見張っている。すなわち、王は土地からの租税を集めるだけで人民が盗賊や反社会的分子によって悩まされていれば、王の義務を果たしているとはいえない。強盗や闘争は武力や厳罰によっても決して鎮めることができない。社会の悪の根源は貧乏と失業であり、これは慈善や喜捨によって片付くものではなく、むしろ悪行に報酬を与え、その上それを助長するだけであろう。正しい解決方法は、農業や牧畜で生活する者に種子や食物を供し、商業で生活する者には必要な資本を供し、そして地方から搾取する方法を見出さないように、役人に適当な給与をとどこおりなく支払うことである。かくして、新しい富が生み出され、地方が盗賊や詐欺師から免れる。このような生産的で満足すべき環境で、人民は欠乏と不安に悩まされず、安楽かつ幸福に子を育てることができよう。そして国庫にあるものや個人が自発的に寄付したものを問わず、蓄積された余剰物を消費する最上の方法は、井戸や池を掘ったり、通商路沿いに木立を植えることであるという（一七四頁）のである。著者はその経典の名をあげないが、これはまさしく Kūṭadanta-suttanta (DN. 1, p. 135) などにみえる経説に相当している。

五

著者の佛教に対する見解には独創的なものがみられ、われわれを啓発するところが多いが、また、佛教学もしくは佛教史上不自然で妥当性を欠くとみられるものもある。八正道がギリシア人の身体に対する体育の関係と同じであるとする説、比丘の僧伽はサバー（部族集会）の線に沿ってその集会を組織運営したとする説などは参考に値するが、三蔵を律、論、経の順序であげたり、アショーカは僧院をつくらなかった(二七九頁)、クシャーン朝の始祖はカニシカ一世で金貨を発行したカニシカはこの始祖の孫であろう（二九一頁）とするなどは再考の余地があるようである。

佛教の僧院の出現、その構造、年代の測定、僧院と経済の問題は、著者の関心の的となったものらしく、きわめて緻密な考察がなされている。カールレの大きなチャイティヤにある梁(はり)木は、放射性炭素による測定の結果、紀元前二八〇年のものというが(二一五、二八一頁)、古代の木造建築物で現存するものが

ほとんどないインドにあっては、貴重なデータを提供するものといわねばならない。石窟僧院の構造、その僧院の部派所属、僧院と佛教徒のギリシア人商人との関係などについては、すでに学者のすぐれた研究があるが（Sukumar Dutt : Buddhist Monks and Monasteries of India）、僧院と経済との関係を科学者の立場から究明したものはすくないのである。資本を蓄積し、それを供給した大僧院の刺戟のもとで都市が発達し、内陸と海上との貿易がさかんになったことを、ナーガールジュナコンダやカーンチーの事例で論述するが（二九五頁）、われわれはかようなユニークな研究に接することによって、これまで曖昧模糊としてその全貌を把握しかねた大僧院、たとえば「西域記」がナーガールジュナの居住したところとつたえるアーンドラのブラーマラ・ギリ伽藍（Bhrāmara-giri-vihāra 黒蜂山伽藍）の在り方などを知る手がかりを得るようにおもわれる。グプタ朝時代からパーラ朝時代にかけて、ナーランダーおよびその付近にいくつかの大僧院が出現することになるが、その地から、後世この地方全域をさすビハール（州）の名が生まれたことを思えば、政治的にも経済的にも僧院が社会に占める位置は大きかったといわねばならない。なお著者は佛教の僧院と音楽ないし戯曲の問題にも触れ、サンスクリット文学に対する豊富な識見を示すとともに、インド古代文化全体に対して「ギーター」のもつ意味を、マルキストの立場から探っている。

六

本書は D. D. Kosambi : The Culture and Civilization of Ancient India in Historical Outline (London, Routledge & Kegan Paul, 1965) を著者自身の訂正と増補にしたがって山崎利男氏が和訳したものである。

著者のダモーダール・ダルマーナンド・コーサンビー氏（Damodar Dharmanand Kosambi）は、かのデカン地方における佛教研究の先駆者であり、インドにおける佛教研究の開拓者でもあったダルマーナンド・コーサンビー（1871—1947）の子息にして、インドが生んだまれにみるすぐれた科学者・思想家であった。すなわち、かれは数学と統計学とにおいて世界的名声を博したが、また厳父の影響を受けて、サンスクリット文献学、歴史学、考古学、民族学、佛教学等に造詣が深く、とくにインド民族の歴史と文化に対する愛情と熱意とにはなみなみならぬものがあった。

かれは一九三三年以来、インド古典研究の一中心地であるプーナに住み、ファーガッソン・カレッジ（Fergusson College）の教授として、その死のとき（一九六六年六月・五十九歳）まで活動したが、インド古代史の研究は、かれが晩年にもっとも力を注いだ研究部門の一つであった。その歴史研究がマルキシズムの立場からなされたものであることは、訳者の「あとがき」によっても知られるが、マルキシズムはたんなるドグマではなくて、科学の新しい発見と結合させて発展させるべきものであるという、かれの立場は本書にも一貫してつらぬかれている。そしてその態度は前著の An Introduction to the Study of

Indian History, Bombay 1959 とも終始変わっていない。いずれにしても世界のトップクラスの数学者が自国の民族と文化とを愛するあまり古代史の研究に異常なほどの熱意を示し、このような研究業績をあげたことに敬意を表する他はない。

なお訳文中には、若干われわれが聞いたこともないような言葉が用いられているが（たとえば戒賢論師に対して戒律の教匠などという語が用いられているごとき）、おおむね平易で、ひじょうに苦心したあとがうかがわれる。末尾に付加された「コーサンビー氏のインド史に関する著作」は各章ごとに関係文献とその解説をあたえており、訳者の親切な配慮が示されている。

（昭和四一年一一月　岩波書店　B6　三三七頁）